

## 小説 「ふるさとと太鼓台」

藤田 稔

「ふるさと」、こんなに優しい美しい響きを持った言葉がほかにあるだろうか。都会の喧騒の中にあつて、ふと仕事の手を止めて目を閉じると、少年のころ遊んだふるさとの美しい山や川が浮かんでくる。ふるすとは心の浄化作用を持つ。私が生まれ育った地は新居浜市垣生大東という所でまさに山紫水明の里である。

ふるさと新居浜を語るとき、もっとも思い出深いものは秋祭りと太鼓台である。

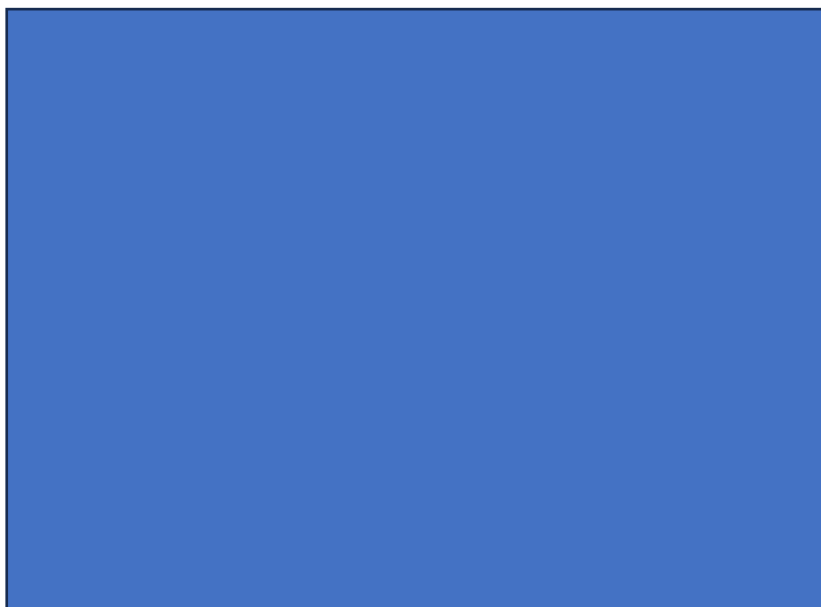
昭和14年（1939）ごろであった。父の勤務の関係上、一時期私たち一家は満州国安東市（現在の中国丹東市）に住んでいた。そこへ同郷の園部謙作青年が満鉄の農事試験場に就職して我が家に下宿した。青年は無口で、礼儀正しく、大変勤勉な方であった。10月半ばのある日のこと、私が学校から帰ると、青年が大きい頑丈な身体を机に突っ伏して慟哭しており、そばに母が立ってなにかしきりになだめている。「どうしたの」と聞くと、母は私のそばに来て「いえね、秋祭りに新居浜に帰って太鼓をかきたいというのよ。でもねえ。」と言った。秋祭りは毎年10月16日～18日の3日間で

ある。郷里から何百里も離れている満州から、そう簡単に帰れるはずもなかった。ふるさとを想う青年の心はいかばかりであったろうか。母もつらかったにちがいない。秋祭りの季節がくるといつも幻のような昔のこのワンシーンが浮かんでくるのであった。

黄金色の稲穂の波のむこうで太鼓台がゆっくり動いてゆく。「チョーイセージャ」という掛け声がのどかに聞こえてくる。赤や青の法被を着た子供たちが、おらが村の象徴ともいふべき豪華な太鼓台を憧憬の眼で追いつづけている。太鼓台の頭上には秋の青空が広がり、背後には美しい瀬戸の海がキラキラと光っている。やがて八幡神社だ。川東地区の十数台もの太鼓台がもうすぐ集結して豪壮なかきくらべが始まるのである。地鳴りのような太鼓の音と鎮守の森をゆるがす掛け声。「ワッショイ、ワッショイ」そして太鼓台の歓喜の乱舞だ。それはまさに一大交響曲であり、その響きは永遠に心に残る。

私達一家3人は事情があり、昭和15年（1940）に新居浜市垣生の実家へ引き揚げた。園部謙作青年はそのまま満鉄に残っていたが、南方戦線へ出征の通知があり、その後戦死された。青年の故郷を想う心はいかばかりであったであろう。心からご冥福をお祈りする次第である。

(注) 太鼓台の写真



毎年、秋祭りに  
太鼓台をかつい  
で練り歩く風習  
は明治時代に  
遡る。その目的  
はその年の米の  
豊作のお礼、来

年の豊作祈願、家族の健康と平和のお祈りにある。新居浜市には各自治体、各地域が独自に太鼓台を制作、保存しており、総合計50台におよぶ。大きさは幅3.4m、高さ5.5m、重量3トン、1台約3000万円である。四国3大祭りの一つで10月18日の山瀬公園での集合、かきくらべには数万人の観光客がくるという。

1970年の大阪万博には3台出場、2025年関西万博にも3台出場して人気を博し、全国的にも有名になった。 (完)

石油分析化学研究所 研究所長

工学博士 (大阪大学) 技術士 (化学)

藤田 稔 (2026年6月1日)